

## 生死の問題

先月号に私は、『やまかは』と『新月』の紹介をかねて、今日に処するみずからの感懐をのべておいたが、あの拙文が印刷に附されている間に、『新月』の著者山川京子さんから私信が届いた。それは、あの文章の中にも引いておいた『はるかなる山河に』についての私の感想の一端を葉書のはしに書きつけておいた、それに対する返事であった。これは私信であるから、ここに公表などするのは礼を失することになるとは思いますが、この手紙は今次の戦争と生死の問題にきびしくふれたものであって、私の心をつよくうごかしたばかりでなく、今月のこの欄に斎藤先生のとらあげられた問題ともつながってゆくところがあるので、京子さんのお許しをまたないで、ここにその一部を抄記させていただきます。

「……………有為な若者たちの殺伐と荒涼の中にあって、いよいよ静かに美しくなっていくた魂のために、私は涙を惜しみませんでした。しかもなほ、私が最もそれらを通して愛惜し追慕を深く

したのは、やはり私の『やまかは』のためでございます。死といふことは格別尊敬すべきものではない、誰もまぬがれることの出来ぬ死の時期が早められたといっても、そのためにすべてが容赦されるべきではない、と私はかねて身辺にさういふ例をもつために、殆ど自戒の如く思つて居ります。『はるかなる山河に』の一人一人の文章も、生死の問題をはなれて批判されるべきではありません。私は若いといふことで未熟は許されなと思ひます。私はあの中に多くの如何なる不自由をも超えて自由な人間の魂のこゑをききました。残虐の中に身をおきながら、はるかなる山河を思ひ平和を愛しあらゆるものを愛したこと。私は誰にも劣らず戦争を忌避致します。永遠の平和のために余生を捧げて悔いませぬ。しかし私たちの生涯を支配した戦争を、あたかも自分に關係なく誰かが始めたことのやうに、無責任に唯當時の為政者を攻撃してゐればよいとは思ひませぬ。私はもっと厳肅な、人の言葉や思想に雷同したものでない戦争への批判を確立したうございます。それは自らのためでもあり、後の人のためでもあり、戦に生命を失つた人たちの満足のためでもございます。……」

(昭和二十三年十月)